

研究報告 平成 27 年度 建築分野 No. 9
旧フランス領インドシナ及び周辺諸国の
モダン・ムーブメント建築に関する保存状況の調査研究

A research and study on the conservation of Modern-Movement Architecture in Former French Indo-chine and its neighboring countries.

東京理科大学理工学部建築学科 教授 山名 善之

(研究計画ないし研究手法の概略)

近年世界中でモダンムーブメント建築保存の機運が高まっている。1964 年のヴェニス憲章の記章をはじめ、その動きは年々増しており、日本国内においては「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」を選定している国際学術組織 DOCOMOMO Japan などによってリスト化、保存状態の調査が行われている。それでもなお、そのような建築が取り壊されたり、価値を損なうような改修が行われている。また、近隣の ASEAN 諸国でも同様の問題が発生しており、近年の発展の影で、歴史的に重要な近代建築の価値が定まる前に喪失されることが日常的となってきた。そこで今回は二つの観点からインドシナ諸国の保存状況調査をおこなう。

(実験調査によって得られた新しい知見)

1 インドシナ諸国における近代建築の保存状況調査

1.0 背景

序で先述したように、近年 ASEAN 地域での近代建築の喪失が増加しているという背景の下、2015 年 10 月 1 日に ICOMOS ISC20c, DOCOMOMO International, mAAN の 3 団体と ASEAN 地域 9 カ国からの専門家らで開催された国際会議で近代建築を含む 20 世紀遺産の現状と課題について討論がなされた。

そのなかで、カンボジアとベトナムの 2 カ国における近代建築は主に仏領期の植民国時代に建設されたものが多い。そのため、近代建築に関する図面を含む資料が散在しているとされる ASEAN 地域の中でも以上の 2 カ国は特にその傾向があると推察できる。また、今後 ASEAN 地域が 20 世紀遺産を保存していくプロセスとして (1) インベントリ (遺産目録) の作成 (2) 理論の構築 (3) 行動計画が挙げられた。特に取り壊しの進む ASEAN 地域においては、インベントリの作成がまず急務であるといえる。

そこで本研究では、仏領期のカンボジアとベトナム 2 カ国を対象とし、歴史的に価値のある近代建築のインベントリ作成と並行して散在している資料の収集・分析及び現地の状況の調査を通して、保存状況の一端を示すものとする。

1.1 カンボジアにおける保存状況調査

1.1.0. 序

カンボジアにおいては、世界遺産であるアンコールワット遺跡とは対照的に、文化遺産としての近現代建築を対象とした保護法律などは存在していない^{註 1-1-1)}。また、カンボジアにおける近現代建築の研究・調査は国内・国外においてはごく少数である。ロスらによる『Building Cambodia: Nre Khmer Architecture 1953-1970』(2006)^{註 1-1-2)}では、1953 年の独立から 1970 年にカンボジア国内で建設されたニュー・クメール・アーキテクチャー (以下 NKA) と呼ばれる建築群がカタログ化されている。また、『Phnom Penh : développement urbain et patrimoine』(1997)^{註 1-1-3)}では、Atelier Parisien d'Urbanisme (APUR) によって、カンボジアの首都プノンペンにおける重要な建築物が調査されている。APUR の調査ではニュー・クメール・アーキテクチャーに加えて、仏領時代に建てられたいわゆるコロニアル様式の建物や、寺社建築なども含まれている。また、プノンペン王立大学による『STHAPATYAKAM The Architecture of Cambodia』(2012)^{註 1-1-4)}は現地の大学によって作成されたプノンペン市内の主要な建築カタログである。

このように、近代建築遺産保存のためのプロセスの初項であるインベントリの作成については、宗主国であったフランスの調査機関や、現地の大学などによるいくつかの資料があることが確認された。今回の現地調査では、2014 年のドコモカンボジア設立を受け、調査が急務となる NKA に対象を絞り、建物の現況把握を行った。2014 年 6 月の現地調査では、『Building Cambodia: Nre Khmer Architecture 1953-1970』に記載されている NKA は 41 件のうち、首都プノンペンに所在する 27 件を対象とした。対象を (表 1) に示す。

脚注: 註 1-1-1) Grant Ross, Helen THE CAMBODIAN TALIESIN - unloved modern house - shunned architect 註 1-1-2) Grant Ross, Helen & Collins, Darry (2006) "Building Cambodia: New Khmer Architecture, 1953-1970", The Key Publisher Company, 註 1-1-3) Atelier parisien d'urbanisme (1997) "Phnom Penh: développement urbain et patrimoine", Paris, France 註 1-1-4) Department of Media and Communication Royal University of Phnom Penh, (2012) "STHAPATYAKAM The architecture of Cambodia"

▼表 1 研究対象 (27 作品)

記	名	竣工年
1	Chaktomuk Conference Hall	1961
2	Municipal Apartments	1963
3	Olympic Village Apartments	1963
4	National Bank Apartments	1963
5	Sangkum Reastr Niyum Exhibition Hall	1961
6	Preah Suramarit National Theatre	1968
7	Chenala State Cinema	1969
8	Cambodiana Hotel	1969
9	Chamkar Mon Compound: State Palace	1966
10	Vann Molyvann's House	1966
11	School of Applied Arts & Engineering	1965
12	Independence Monument	1962
13	Phnom Penh Cathedral	1955
14	Council Ministers	1950
15	International Aid Agencies	1956
16	Ministry of Defence	1962
17	Ministry of Finance	1967
18	One Hundred Houses	1965
19	The 'Round House'	1971
20	Preah Kosomak Centre	1969
21	Khmer-Soviet Friendship Hospital	1960
22	Institute of Technology	1964
23	Institute of Technology Housing	1964
24	University of Phnom Penh	1968
25	Teacher Training College	1972
26	The National Sports Complex	1964
27	Pochentong Airport	1959

▼表 2 竣工時と現在の用途

記号	初期の用途	現在の用途
1	娯楽	娯楽
2	住宅	住宅
3	住宅	商業
4	住宅	住宅
5	娯楽	商業・住宅
6	娯楽	減失
7	娯楽	娯楽
8	住宅	住宅
9	行政	行政
10	住宅	住宅
11	教育	軍事
12	記念碑	記念碑
13	宗教	減失
14	行政	減失
15	行政	行政・住宅
16	行政	行政
17	行政	軍事
18	住宅	住宅
19	住宅	病院
20	教育	教育
21	病院	病院
22	教育	教育
23	住宅	減失
24	教育	教育
25	教育	教育
26	娯楽	娯楽
27	交通	交通

凡例) 用途変更があったもの

1.1.1. 改修・用途変更の観点からみた現況分析

「20 世紀の産物である『モダニズム建築』の破壊が行われるのは、建物がその用途的価値を失うことによるものである 場合が多い。」^{註 1-1-5)}と述べられるように、「用途変更」は近代建築の現況調査を行う上で重要な視点であり、「改修」は建物の竣工後に物理的な変更が加えられることであるが、改修の際に建物価値を損なう可能性がある。よって「用途変更」・「改修」の 2 つの観点から現況整理を行う。対象作品の用途分類に関しては、ドコモモ国際選定で用いられるフォーマット^{註 1-1-6)}に従う。

実際に用途変更があったものは27件中6件であり、半分以上の作品が初期の用途のまま使われていることが分かった。(表2)

竣工時の用途では行政施設・教育施設・レクリエーション施設・住居が 5 件以上と多かった。現在の用途では、竣工時に多かった上記の 4 つは減少し、新たに商業施設・軍事施設が増加した。また、4 件は現在に至るまでに取り壊された。取り壊しの原因として、火災、内戦、劣化が確認できた。

用途は変わっていないものの、所有者や住人などに変化がみられ、それに伴う改修が行われたものも確認できた。また、用途変更に伴う改修では、劇場の座席数変更など外観に現れてこない改修があった一方で、商業施設などへの用途変更で建物が外観的にほとんど作り変えられてしまうものもあった。

次に対象資料・現地調査から得た対象作品群に関する改修についての情報をまとめ、表に示す。(表3)

用途別に見てみると、レクリエーション施設と行政施設において改修が行われたものが 5 件中 4 件と多かった。レクリエーション施設は映画館や劇場、ギャラリーなどが含まれており、時代の推移によってコンテンツが変わり、要求性能が変化しやすいため改修が行われていると推測できる。またカンボジアにおいて、対象作品群が竣工し始めた 1950 年頃から現在に至るまで、内戦を経て政権が数回にわたり変わったため、行政施設における要求性能も変化することが多かったため改修が多く行われたのではないかと推測できる。

改修内容をみてみると、塗装が施された例がいくつかあったが、1:Chaktomuk Conference Hall ではピンク色、2:Municipal Apartments では緑色、3:Olympic Village Apartments では黄色と、オリジナルの色とは全く違う色によって塗装されているものがほとんどであった。改修の発注元は明らかではないが、建物を元の状態のまま維持していくという考え方が欠如していることが伺える。

9:Chamkar Mon Compound、18:One Hundred Houses ではピロティを壁でふさぎ内部空間にする改修がみられた。

25:Teacher Training College、26:The National Sports Complex にみられる敷地外構部分への開発行為は、建物部分ではなく堀などのランドスケープを改修によって変えてしまうものである。26:The National Sports Complex における建物の外周をまわる堀は、設計者ヴァン・モリヴァンによる明確な設計意図のもと計画されている^{註 1-1-7)}が、開発行為によって既に一部が失われていた。

註 1-1-5) 山名善之 (2000)『建築文化 vol.55 ヨーロッパ・モダニズム建築保存事情：フランス 保存意識はいつ生まれるか』、彰国社、p.60 註 1-1-6) ドコモモにより規定。全 18 種類のタイプに分けられる。註 1-1-7) Daravuthly, MuanIngrid. Cultures of Independence: An Introduction to Cambodian Arts and Culture in the 1950's and 1960's. Phnom Penh, Cambodia : Reym Institute of Arts and Culture, 2001. pp.14

また、5:Sangkum Reastr Niyum Exhibition Hall ではオリジナルの建物が取り壊される際に、オリジナルを模した建物が敷地内に増築されるという特殊な事例もみられた。

以上、用途変更と改修について述べてきたが、プノンペンの NKA の現況について次のように述べることができる。

プノンペンの NKA においては、いくつかの資料により、重要な建築物であることは言及されているものの、その現況を見てみると、既にまったく異なる用途への変更によって大部分を作り変えられてしまう事例、塗装などの小規模な改修行為においても、建物の元の状態を意識されない作業が確認できた。このように、プノンペンにおける NKA の近代建築遺産としての保存意識は低いものといえる。

▼表 3 改修内容（改修が確認できたもののみ抜粋）

記号	改修年	改修内容
1	2000	・座席数の減少・壁が部分的にピンク色に塗られる
2	?	・内壁、外階段部分が緑色に塗られる・外階段部分の補修
3	2000	・外壁の作り変え・低層部テナント化
	?	・外壁が黄色に塗られる
5	1997	・オリジナルの部分的なレプリカが建てられる
	2013	・オリジナルが部分的に取り壊される
	?	・オリジナルの建物の一棟が店舗になる
7	2002	・Canadia Bank による改修・敷地内に新たな建物が建てられる
9	1998	・Royal University of Fine Arts を卒業した Tong Ly Cheng によって改修が行われる・シハヌーク王のオフィスが中国人技師のための部屋へ改修される・中央受付が壁で囲われ、空調が導入される
16	?	・ヒロディ部分が埋められる・タイル屋根が加えられる
18	?	・住人それぞれによる改修
20	1981	・旧ソ連の援助による改修（内容不明）
21	2014	・敷地内に新たな建物を建設中
24	?	・メインホールの屋根の改修
25	2006	・フランスの会社に借用され、インテグリティを保った改修が行われる
	2005	・JICA が敷地内に新たな建設を許可したため、堀が埋められ、大きな木が伐り倒された
26	2000	・台湾の企業に改修を条件に譲渡される・堀が部分的に埋められる
	2014	・堀・テニスコート・駐車場などの部分に新たな商業施設・ホテル・住宅などが建設中
	進行中	・貯水タンクが徐々に地下駐車場に変えられ、また新たな建物の基礎として使われる・敷地内に高層の建築物が建設中
27	1966	・VIP 到着用バウリオリオンの補強

1.1.2. 100 戸のローコスト住宅における改修状況の考察

作品ごとの改修状況の中で特に改修に多様性がみられた「100 戸のローコスト住宅」（図 1）に着目し考察を行った。標準化住宅である「100 戸のローコスト住宅」では、住人ごとに要求性能が異なることから改修状況に多様性が生じている。住戸ごとの現況を調査し、改修の傾向を分析した。

「100 戸のローコスト住宅」は、建築家ヴァン・モリヴァンによって設計され、1965 年に竣工した。プノンペンの市街とポチェントン空港を結ぶ道路と鉄道の間にある 6.5 ヘクタールの敷地に建っており、竣工当初はカンボジアナショナルバンクの職員の為の住宅として設計されたが、クメール・ルージュ後はプライベートハウスとして各住人が所有している。左右対称の住戸が 50 戸ずつ、計 100 戸で構成される。道路によって 6 つのまとまりができており、各敷地の奥・手前と交互に配置されている。（図 3）

現地にて各住戸の現在の状況を調査し改修状況を把握する。調査結果を、ヴァン・モリヴァンによる設計要素であるピロティ・窓・屋根に着目し分類した。結果を（表 4）に示す。

オリジナル状態が残っていたものは 11 戸であったが、その中でも現在使われていないものが 2 戸あり、この状況からほとんどの住戸がオリジナルの状態で利用されていないといえる。

改修で一番多かったのが B: ピロティ改修のパターンが 52 戸、次いで E: 敷地内の増築のパターンが 37 戸であった。これは、オリジナルの状態から、より内部空間を増やすためにピロティを壁で囲い内部としたり、敷地内へ増築を行ったものであると考えられる。オリジナルの部屋数は、水回りを除くとリビング・寝室の 2 部屋しかなく、個室や作業空間を確保するには、コンクリート柱で強固に作られたピロティ空間は良いフレームとなり改修しやすいものであったのだと考えられる。

C: 窓部分への改修は 29 戸であった。改修内容としてはガラスがはめられた窓に変更されているものがほとんどであった。これはエアコンの普及によるものであると考えられる。また二階部分にバルコニーを増築し、窓をバルコニーへの出入り口として使用しているものもみられた。床から天井までの大きな窓という特殊な形が活かされている例といえる。

D: 屋根部分に変更がみられるものは 10 戸であったが、そのほとんどが敷地内に二階建て程度の増築を施しており、その増築部分と一体的に屋根形状を改修しているものであった。

このように、主に内部空間の不足や生活スタイルの変化が改修に起因していることが分かった。ローコスト住宅として作られたこれらの住戸は、住民の要求性能の変化によって住戸ごとに改修がなされていた。

▼表 4 100 戸のローコスト住宅現況分類結果

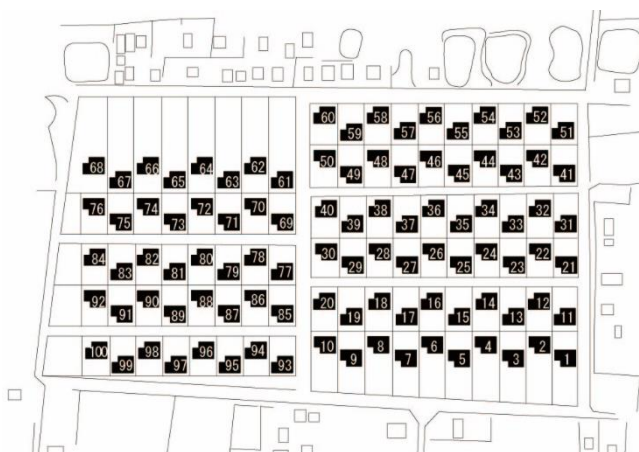
記号	状況	戸数
A	オリジナルの状態で保たれているもの	11
B	ビロティ部分に改修がみられるもの	52
C	窓部分に改修がみられるもの	29
D	屋根部分に改修がみられるもの	10
E	敷地余白部分への増築がみられるもの	37
F	消失したもの	22



▲図 1. 住戸ユニット註 7)



▲図 2. 改修例註 8)



▲図 3-3. 全体配置図註 9)

1.2 ベトナムにおける保存状況調査

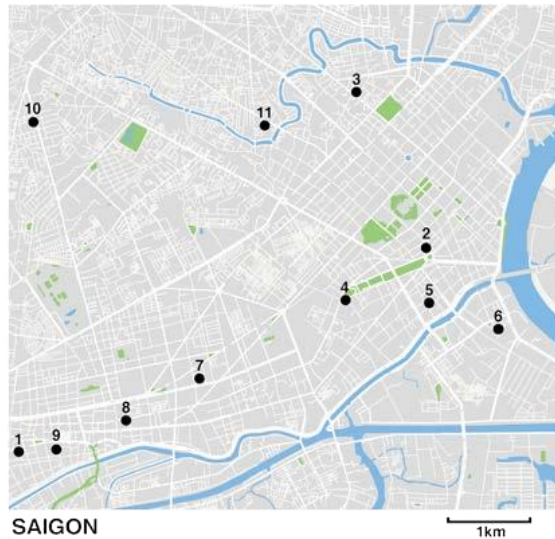
ベトナムにおける近代建築の調査研究として、ハノイ・ホーチミン・フエに関するものはすでになされておりインベントリ化もほぼ終えている。しかし、仏領期のベトナムの近代建築を見る上で着目すべき都市は他にも多数存在する。その中で、ホーチミンの東側の高地に位置するダラットもその一つであるといえる。それまで山間部であったダラットは 20 世紀初頭にフランス人によってヒルステーション都市としての開発がなされた。ヒルステーションとは、宗主国の者が植民国に移動してきた際、気候の変化などに対処するため高地に開発された、自国の文化を色濃く反映した都市である。そのため、ダラットに当時建設された建築はフランスの多分に影響を受けており、近代建築の潮流に則した者であると考えられる。そこで本稿は、ベトナム・ダラットにおける近代建築のインベントリ作業及び、現況の使用状況及び保存状況を明らかにすることを目的とした調査の一端を示す報告書とする。

▼表 1. 今回の調査の対象とした建築及びその住所

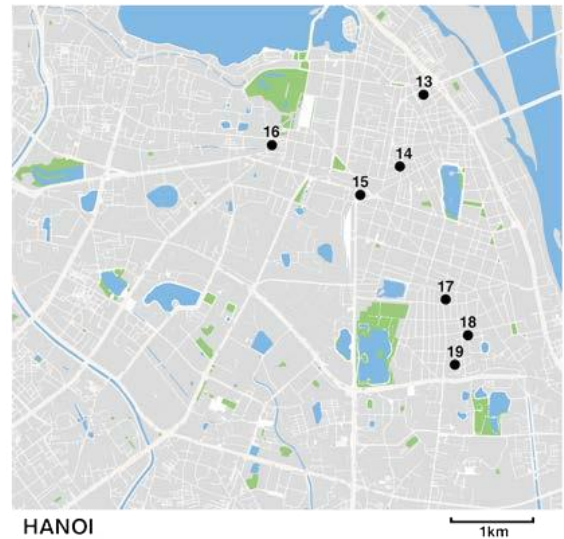
記号	ベトナム名	英名	住所
1	dinh Bao Dai	Bao Dai Summer Palace	Phường 4, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
2	Cho Dalat	Dalat Market	Nguyễn Thị Minh Khai, tp. Đà Lạt, Phường 1, ベトナム
3	Vien nghiên cuu hat nhan Dalat	Atomic Institute of Dalat	1 Nguyễn Tử Lực, Phường 8, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
4	Ga Dalat	Dalat Station	Phường 10, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
5	Trường Lycee Yesin xay	Dalat Teacher's Training College	29 Yersin, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
6	Xí nghiệp Bản đồ Đà Lạt	Enterprise Map Dalat	6/4 Nguyễn Du Thành Phố Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
7	Khách sạn Dalat Palace	Dalat Palace Hotel	12 Trần Phú, 3, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
8	Khách sạn Hotel du Parc	Hotel du Parc	7 Trần Phú, 3, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng 0 ベトナム
9	Giáo phận Đà Lạt	Diocese of Dalat	tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
10	Công ty Vắc xin Pasteur Dalat	Dalat Pasteur Institute	18 Lê Hồng Phong, 4, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
11	Trường Pho Thông DTNT Lâm Đồng	—	2 Huyện Trần Công Chúa, Phường 5, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
12	Nhà thờ Cam Ly	Cam Ly Church	Nguyễn Khuyến, Phường 5, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム
13	Nhà Tho Đạo Tin Lanh	Protestant Church	Nguyễn Văn Trỗi, tp. Đà Lạt, Lâm Đồng, ベトナム

2.1. インドシナ地域における公設市場の現地調査

ベトナム3都市（ハノイ・ホーチミン・ダラット）、カンボジア1都市（プノンペン）において、公設市場について現地調査を行った。各国の近代建築遺産のインベントリ作成を踏まえ、地図上で確認できる公設市場をできるかぎりプロットし、現況を調査した。ベトナム2都市（ハノイ・ホーチミン）のプロット図と確認した市場を以下に示す（図1・2）（表1）。なおダラット・プノンペンについては、各都市1つの市場しか確認していない。4都市で20の公設市場を確認し、実際に17箇所を訪ねることができた。



▲図1. 市場プロット図（ハノイ）



▲図2. 市場プロット図（ホーチミン）

▼表1. 各地で確認できた公設市場

記号	名称（英表記）	名称（カナ）	都市
1	Binh Tay Market	ビンタイ	ホーチミン
2	Ben Thanh Market	ベンタイン	ホーチミン
3	Tan Dinh Market	タンディン	ホーチミン
4	Thai Binh Market	タイビン	ホーチミン
5	Dan Sinh Market	ヤンシン	ホーチミン
6	Xom Chieu Market	ソンチウ	ホーチミン
7	An Dong Market	アンドン	ホーチミン
8	Xa Tay Market	サータイ	ホーチミン
9	Kim Bien Market	キムビエン	ホーチミン
10	Tan Binh Market	タンビン	ホーチミン
11	Nguyen Van Troi Market	グエンヴァントロイ	ホーチミン
12	Dalat Market	ダラット	ダラット
13	Dong Xuan Market	ドンシャン	ハノイ
14	Hang Da Market	ハンダ	ハノイ
15	Cua Nam Market	クアナム	ハノイ
16	Ngoc Ha Market	ゴックハー	ハノイ
17	Hom Market	ホム	ハノイ
18	Nguyen Cong Tru Market	グエンコングトゥルー	ハノイ
19	Troi Market	トゥロイ	ハノイ
20	Central Market	セントラル	プノンペン

① ビンタイ市場：ホーチミン

ホーチミンの中心街から西へ約5kmほどのエリアにある華人が住むエリア（チョロン地区）に位置する。cho：市場、lon：大きい という言葉の意味があり^{註2-1-1)}、この市場がこの地区に大きな位置を占めていることが伺える。敷地は約16000㎡であり^{註2-1-2)}、外観は華人系の地区だからなのか、ベトナムの他の市場にはない屋根形式をもっている。中庭を囲むような配置形式も、他の市場事例には見られなかった特筆すべきことである。



▲図①-1. 市場外観



▲図①-2. 内観吹き抜け部分



▲図①-3. 中庭



▲図①-4. 店舗レイアウト図

※写真はすべて筆者撮影

註 2-1-1) 地球の歩き方編集室 (2013) 『地球の歩き方 ベトナム 2013-2014』, ダイアモンド・ビッグ社, pp.69 註 2-1-2) google maps を基に算定した

②ベンタイン市場：ホーチミン

17000 m²ほどの規模を持つホーチミン市最大の市場。食料・衣料・生活雑貨などあらゆる品がそろう。正面にはロータリーが広がり、交通量も多い。週末夜には、接する道路にも露店が展開し賑わいを見せる。RC造による屋根架構をもつ市場のひとつである。



▲図② -1. 市場外観



▲図② -2. 外観（夜）



▲図② -3. 内観



▲図② -4. 店舗レイアウト図

※写真はすべて筆者撮影

③タンディン市場：ホーチミン

タンディン地区の中心に位置する約 3000 m²の規模を持つ市場。1926 年から 1927 年にかけて建設され、RC造の躯体を持つ^{註 2-1-3}。



▲図③ -1. 市場外観



▲図③ -2. 内観



▲図③ -3. 屋根架構



▲図③ -4. 構造接合部

※写真はすべて筆者撮影

④タイビン市場：ホーチミン

ファングーラオ通りとコングイン通りに挟まれた三角形の敷地に位置する約 2000 m²の規模を持つ市場。外壁にはRCの構造体が見られるが、屋根は簡易的な鉄骨が用いられていた。



▲図④ -1. 市場外観



▲図④ -2. 外観



▲図④ -3. 内観



▲図④ -4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

⑤ヤンシン市場：ホーチミン

ベンタイン市場の南部に位置する小規模な低層市場。主にミリタリーグッズが取り扱われている^{註 2-1-4}。



▲図⑤ -1. 市場外観



▲図⑤ -2. 内観



▲図⑤ -3. 市場内マップ



▲図⑤ -4. 店舗

※写真はすべて筆者撮影

^{註 2-1-3} Lê Quang Ninh, Stéphane (2015) 『SAIGON - BA THẾ KỶ PHÁT TRIỂN VÀ XÂY DỰNG』, Horg Duc, pp. 178-179 ^{註 2-1-4} 球の歩き方編集室 (2013) 『地球の歩き方 ベトナム 2013-2014』, ダイアモンド・ビッグ社, pp. 68

⑥ ソンチュウ市場：ホーチミン

ホーチミン 4 区の北部に位置する市場。6000 m²ほどの規模を持ち、建物は二階建てである。地上階の中心に天井の高い食料売り場があり、それを囲むように回廊型の平面をした衣類を主な商品としたフロアが 2 層にわたって展開する構成となっている。建物のファサードにはコンクリートが確認された。



▲図⑥ -1. 外観



▲図⑥ -2. ファサード



▲図⑥ -3. 二階衣類売り場



▲図⑥ -4. 地上階食料売り場

※写真はすべて筆者撮影

⑦ アンドン市場：ホーチミン

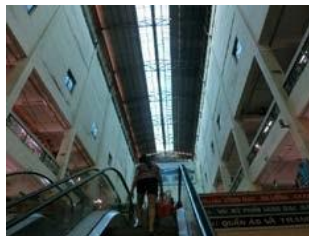
チョロン地区の中心から約 2km 東に位置する。5000 m²ほどの規模をもつ。地下一階、地上三階建てであり、内部の大きな吹き抜けが特徴的である。またコンクリートを編み込んだようなファサードをもっている。2・3 階には衣類を中心に販売しており、活気がある。



▲図⑦ -1. 外観



▲図⑦ -2. ファサード



▲図⑦ -3. 吹き抜け部分



▲図⑦ -4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

⑧ サータイ市場：ホーチミン

チャンフンダオ通りとグエンチャイ通りをつなぐ道沿いにある^{註 2-1-5)}小規模な市場。簡易的な骨組みで構成されており、肉・野菜・果物などの食料や生活雑貨などが売られる。



▲図⑧ -1. 外観



▲図⑧ -2. 外観



▲図⑧ -3. 内観



▲図⑧ -4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

⑨ キムビエン市場：ホーチミン

ビンタイ市場から西へ 300m ほどのところにある小規模な市場。低層の市場だが 3000 m²ほどの広がりを持つ。外接する道路にも露店が展開している。



▲図⑨ -1. 外観



▲図⑨ -2. 隣接道路にならぶ屋台



▲図⑨ -3. 内観



▲図⑨ -4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

註 2-1-5) 球の歩き方編集室 (2013) 『地球の歩き方 ベトナム 2013-2014』, ダイアモンド・ビッグ社, pp. 73

⑫ダラット市場：ダラット ベトナムの高原地帯であるダラットの中心に位置する市場。窪地の地形の底に位置しており、ブリッジによって市場

へ直接アクセスできる。複数棟が連結して構成されており隣接する新しい市場とともに約 9000 m²ほどの規模に広がっている。花や衣類（セーター・マフラーなど）、果物など高原地帯の市場ならではの商品が多い。夕方から周囲の道路に屋台が並ぶ。



▲図⑫-1. 外観



▲図⑫-2. 内観



▲図⑫-3. ブリッジ



▲図⑫-4. 道路に展開する露店

※写真はすべて筆者撮影

⑬ドンシャン市場：ハノイ

ホアンキエム湖の北、旧市街地区にあるハノイ最大の市場。約 12000 m²の規模を持ち、3 階建てである。衣料品などが豊富。内部には大きな吹き抜け空間があり、大屋根が架かる。



▲図⑬-1. 外観



▲図⑬-2. 内観



▲図⑬-3. 内観



▲図⑬-4. 吹き抜け部分

※写真はすべて筆者撮影

⑭ハンダ市場：ハノイ

2010 年新装オープンした市場^{註 2-1-6}。絵画やアート作品などを扱うデパートとなっている。



▲図⑭-1. 外観



▲図⑭-2. 内観



▲図⑭-3. 内観

※写真はすべて筆者撮影

⑮クアナム市場：ハノイ 地図表記は市場となっているが、ビルが建っており、地下にコンビニエンスストアのような店舗が入っていた。



▲図⑮-1. 外観



▲図⑮-2. アプローチ階段



▲図⑮-3. 内観



▲図⑮-4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

註 2-1-6) 球の歩き方編集室 (2013) 『地球の歩き方 ベトナム 2013-2014』, ダイアモンド・ビッグ社, pp. 275

⑩ゴックハー市場：ハノイ

ホーチミン廟の南部に位置する 2000 m²程度の規模を持つ低層市場。主に食品などが扱われている。



▲図⑩-1. 外観



▲図⑩-2. 外観



▲図⑩-3. 内観



▲図⑩-4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

⑪ホーム市場：ハノイ

バイマウ湖の北東部に位置する 3000 m²程度の規模をもつ市場。建物の隅にエントランスがある。確認した市場のなかで唯一屋上が開放されていた。屋上にはダンス教室などがあり、植栽がなされていた。



▲図⑪-1. 外観



▲図⑪-2. 外観



▲図⑪-3. 内観



▲図⑪-4. 内観

※写真はすべて筆者撮影

⑫トゥロイ市場：ハノイ 小さな露店が集まって形成されている市場。雑貨や工具などあらゆるものが売られている。



▲図⑫-1. 市場エリア入り口



▲図⑫-2. 道に並ぶ屋台



▲図⑫-3. 屋根が集まっている場所

※写真はすべて筆者撮影

⑬セントラルマーケット：プノンペン カンボジアのプノンペンの中心に位置するプノンペンで最大の市場である。

1937 年仏領期に建設され、植民地建築の

象徴と捉えられる一方で、現在でも重要な経済の拠点として機能している。2004 年から 2011 年にかけて現在の要求性能への応答および経年劣化の修復を兼ねた改修が行われた。その際、Paris City Hall や the Parisian Urban Planning Studio (APUR) といったフランスの機関も介入し、多くの調査が行われ、結果として排水設備や水路などのインフラ性能の向上や劣化のあった床や屋根のコンクリートの修繕などの社会的に有用とするための保全と同時に、オリジナルの構造体や特筆すべきドームの形状など多くの部分についての変更は最小限とするなど遺産としての価値を検討した改修が行われた^{註 2-1-7)}。



▲図⑬-1. 外観



▲図⑬-2. アプローチ部分



▲図⑬-3. 中心部内観

※写真はすべて筆者撮影

註 2-1-7) Corinne Callebaut & Steven Prigent (2011) 『Marché Central: Histoire d'une Rénovation : Central Market: Story of a Renovation』, Melon Rouge